



KIHS 甲南大学人間科学研究所では、

昨秋から「育てることの困難」を

テーマとする研究会を重ねてきました。

さらに議論を深めるべく7月23日（日）に第7回公開シンポジウム
「育てることの困難——家族・教育・仕事の今を考える」を開催します。

多くの方々のご参加をお待ちしております。

今号よりデザインを一新したKIHSニュースレター。

第9号では、シンポジウムに先立って行われた

研究会の様態をレポートします。





研究会報告

現代は子育てが困難な時代といわれます。子育て中の人々からは育児ストレスやノイローゼに苦しんでいる声が聞かれ、またこれから子どもを産む世代の人々からも子育てに対する不安の声が聞かれます。そうした苦しみや不安を解消していくためには、その実体をつかみ、原因となる背景を見極めることが必要です。今回の研究会では、家族社会学がご専門の中里氏を講師に招き、日本社会の労働や子育てのあり方、育児観における男女差、世代差などの統計的データをもとに、とくに労働の観点から、子育てが困難になっている背景を探っていただきました。

時代が進むにつれ、夫も家事・育児を分担するのは当然だという意識は高くなり、時間的ゆとりさえあれば実行している男性も増えてきました。しかし就労条件が厳しくなると、途端に難しくなるのが現状です。男性は仕事・女性は家庭という役割分担が根深く残っており、夫婦ともに「同じように」仕事と家庭を両立させることはまだまだ難しいようです。中里氏は、その実体を、多数のデータを分析しながら論じられました。

まず、日本の年齢別女子労働力率の推移のデータ(1960~2000)からは、出産・育児期間にある年齢層の就労率が一旦下がるという特徴は現在も見られます。最も低下しているのが70年代で、その後少しずつ上昇しており、一見すると家庭と仕事の両立が進んだかに見えます。しかし、国や外郭団体による調査「年齢別未婚率の推移」「年齢別出生率の推移」(2000)、あるいは中里氏独自の調査「女性のライフコースにおける結婚・出産経験の変容」(2005)を見ると、独身者、あるいは結婚しても子どもをもたない女性が増えています。こうした女性たちが働くことで就労率を上げているにすぎないこと、そして子育てがしにくく、家事・育児の負担が女性にのしかかる環境に変わりはないことが推測できます。さらに、この推測を検証する調査の分析結果として次のデータが挙げられました。出産半年後では3人に1人、出産1年後では1.7人に1人の母親が退職していること、母親の就労の有無にあまり関係なく父親の育児への参加率が低いこと、子どもの出生半年後の父親の4人に1人が週60時間以上、3人が週40~60時間の長時間労働をしていること、また、幼少期は母親が育児に専念すべきだといういわゆる「3歳児神話」が世代を超えて共有されていること、などです。女性のライフコースが多様化し「専業主婦」が多数派ではなくなったにも関わらず、実際に仕事と家庭を両立させようとすると、それを困難にする諸条件がみつつけられます。

ところが、共働きの環境が日本よりも整っているとされる欧米では、それにともなって地域コミュニティの希薄化が起り、家庭に残った人への負担が増大するというジレンマが生じているといえます。ではこのジレンマを打開しつつ、よりよい子育て環境を作っていくにはどうすればよいのでしょうか。中里氏は、生活上の必要性に応じて「自発的に」労働時間が選択でき、多様な働き方ができるようになること——もちろん将来の保障がなくなるとはいけない——が必要であるといえます。そして、この働き方を実現しようとしている企業の取り組みを紹介されました。たとえば日単位・週単位の勤務労働時間短縮や、柔軟な労働時間の管理、在宅勤務、男女を問わない人材活用、人生設計を視野に入れた働き方の奨励などです。このような取り組みは、大手企業だけでなく、小さな会社でも実践されています。もちろんその数はまだまだ小さく、しかも取り組みの初期段階にあって、その成果が確認されていないため、楽観はできません。したがって、柔軟で多様な働き方が発展していくには、こうした取り組みがなされていること、そしてそれが企業にも働く人にも損失にならないことが社会的に知られること、また行政からの支援が行われることが求められると締めくくられました。

子育ての困難と働き方



講師：中里 英樹

(甲南大学文学部／家族社会学)

企画：高石 恭子

(甲南大学文学部／臨床心理学、学生相談)

日時：2006年3月10日(金)

場所：18号館 3階 講演室

青少年における 非社会性の「病理」



講師：齋藤 環

(爽風会佐々木病院／精神医学)

企画：高石 恭子

(甲南大学文学部／臨床心理学、学生相談)

日時：2006年4月8日(土)

場所：18号館 3階 講演室

おたく、ひきこもり、フリーター、ニート。さまざまなキーワードによって切り取られる「今時の若者」たち。彼らの姿は、彼らを育ててきた現代社会のありようを映し出す鏡です。「育てることの困難」研究会の第4回目となる今回は、精神科医・評論家として日々精力的な活動を繰り広げられる齋藤環氏を講師に迎え、思春期・青年期の問題、彼らを取り巻く社会や家族についてご講義いただきました。

青少年による犯罪が新聞・テレビなどでセンセーショナルに取り上げられる昨今、これらの事件報道に触れていると、まるで現代の若者は凶悪化しているかのように見えます。しかし統計資料などを参照すれば明らかなのですが、実際には戦後日本の青少年による凶悪犯罪の件数は著しく減少しています。精神科医として日々臨床にあたっておられる齋藤氏は、現代の青少年の姿を捉えるには「反社会性」よりむしろ「非社会性」という言葉のほうがふさわしいといいます。社会に広く薄く漂う幻滅感や絶望感のなか、若い人たちは、かつて社会にぶつけてきたエネルギーを、内向あるいは沈潜させつつあるのです。

この青少年の非社会化傾向とは、1970年後半より目立つようになってきたものです。当時は「スチューデント・アバシー」や「三無主義」と呼ばれていました。齋藤氏の著書、『社会的ひきこもり』（PHP新書）によって90年代後半から広く認知されるようになった社会的ひきこもりの問題も、すでに80年代半ばにはありふれた状態となっていました。いったい70年代以降、青少年のなにが変わったのでしょうか。

齋藤氏は、青少年の非社会化という現象を、成熟の遅れという観点から捉えています。私たちの社会からは通過儀礼の機会が失われ、モラトリアム期間はますます長期化しつつあります。成熟の遅れはある意味、社会のほうで成熟期を迎えたからこそ起こる現象であるとも言えるでしょう。無我夢中にならなくてもどうにか食べていくことができる社会では、誰も慌てて大人になる必要などないからです。齋藤氏は、現代の成人年齢は「35歳」と考えるのが妥当だといいます。

成熟の遅れの要因がいくつか挙げられました。そのなかでとくに強調されたのが「自明な価値観への懐疑」です。なぜ働かなくてはならないのか。なぜ結婚しなくてはならないのか。なぜ人を殺してはいけないのか。これらの問いは、他者が答えることのできないものです。なぜならそれは「自明な価値観」にまつわるものだからです。そしてこの自明な価値観を育み得るのは家族しかない、と齋藤氏は主張します。

その家族のありかたが、この数十年、急速に変貌しつつあります。少子化、核家族化、母子密着と父親疎外。現代の若者の成熟の遅れと非社会性の問題は、家族機能の衰退に深く関係しています。日本と同じくひきこもり（韓国ではウェットリ——仲間はずれ、ひとりぼっちの意——という）問題を抱える韓国では、日本以上に学歴偏重の傾向が強く、子どもの教育のために母子が密着し父親が居場所を失うケースが多発しているといえます。

ひきこもりをはじめとする青少年の非社会性の背景にあるものを考えると、それらの問題は、成熟した社会をもつ諸外国にとって共通のものではありません。では、なぜひきこもりは日本や韓国で突出しているのでしょうか。齋藤氏は、欧米ではひきこもりが少ない代わりにヤング・ホームレスが多いことに言及しました。ヤング・ホームレスは犯罪の温床となることもあり、欧米諸国では社会問題と化している現象です。ヤング・ホームレスの問題を考えると、日本の若者はひきこもることで、犯罪抑止に貢献しているといえるかもしれません。

このような考えは穿った見方と思われるかもしれませんが、しかし、現実社会に浮かび上がってくる様々な問題は、網の目のような社会のシステムが下支えているものです。問題となる現象のみをとりあげ、それを感情論や印象論で攻撃することには何の益もないのではないのでしょうか。今、目の前で困っている人に救いの手を差し伸べること。長期的な視点で何が起きているのかを見極めること。齋藤氏の活動はまさにこの2つの方向からなされているものであるといえるでしょう。

● これまでの活動 2006年2月～2006年5月

研究会

第26回 いま——戦後効率主義の帰結

日 時：2006年2月27日(月)
講 師：吉岡 洋(情報科学芸術大学院大学/文化・芸術理論、現代思想)
企 画：川田 都樹子(甲南大学文学部/美学・芸術学)

第27回 子育ての困難と働き方

日 時：2006年3月10日(金)
講 師：中里 英樹(甲南大学文学部/家族社会学)
企 画：高石 恭子(甲南大学文学部/臨床心理学、学生相談)

第28回 青少年における非社会性の「病理」

日 時：2006年4月8日(土)
講 師：斎藤 環(爽風会佐々木病院/精神医学)
企 画：高石 恭子(甲南大学文学部/臨床心理学、学生相談)

第29回 ニート・ひきこもり支援とカテゴリー化

日 時：2006年4月24日(月)
講 師：田中 俊英(NPO法人淡路ブラッツ/青少年自立支援)
企 画：川田 都樹子(甲南大学文学部/美学・芸術学)

第30回 都市社会とコミュニティ・サポート

日 時：2006年5月29日(月)
講 師：羽下 大信(甲南大学文学部/臨床心理学)
企 画：川田 都樹子(甲南大学文学部/美学・芸術学)

心理臨床ワークショップ

第3回 ト라우マ臨床と精神分析的アプローチの齟齬

日 時：2006年3月19日(日)
講 師：奥寺 崇(赤城高原ホスピタル/精神医学)
企 画：森 茂起(甲南大学文学部/臨床心理学)
共 催：甲南大学心理臨床カウンセリングルーム
後 援：兵庫県臨床心理士会

● これからの活動

公開シンポジウム

第7回 育てることの困難——家族・教育・仕事の今を考える

日 時：2006年7月23日(日) 13:00～17:30
場 所：甲南大学5号館 511教室
シンポジスト：汐見 稔幸(東京大学大学院教育学研究科/教育学)
中里 英樹(甲南大学文学部/家族社会学)
高石 恭子(甲南大学文学部/臨床心理学、学生相談)
斎藤 環(爽風会佐々木病院/精神医学)
指定討論：中井 久夫(兵庫県こころのケアセンター/精神医学)
北原 恵(甲南大学文学部/表象文化論、美術史、ジェンダー論)
司 会：穂苅 千恵(甲南大学文学部/臨床心理学)
企 画：高石 恭子

※参加には事前の申込が必要です。申込方法はホームページ
<http://kihs.konan-u.ac.jp/> をご覧になるか、当研究所(078-435-2683)までお問い合わせください。

研究会

タイトル未定

日 時：2006年10月20日(金)
講 師：垂谷 茂弘(舞鶴工業高等専門学校/人間論、哲学)
企 画：横山 博(甲南大学文学部/精神医学、臨床心理学、ユング心理学)

タイトル未定

日 時：2006年11月17日(金)
講 師：河合 俊雄(京都市立大学大学院教育学研究科/臨床心理学、ユング心理学)
企 画：横山 博(甲南大学文学部/精神医学、臨床心理学、ユング心理学)

ギリシャ悲劇に現れる暴力の分析(仮題)

日 時：未定
講 師：上村 くにこ(甲南大学文学部/神話論、ジェンダー論)
饗庭 千代子(甲南大学国際言語文化センター/神話論、フランス文学)
企 画：上村 くにこ

男性性と暴力(仮題)

日 時：未定
講 師：千葉 征慶(富士通/臨床心理士、産業カウンセラー)
濱田 智崇(甲南大学人間科学研究科/臨床心理学)
企 画：上村 くにこ(甲南大学文学部/神話論、ジェンダー論)

発行年月日：2006年6月1日



編集後記

子育て支援プログラム「うりぼうくらぶ」(親子の遊び教室)で、いつも子どもたちの相手をしてあげているクマさん。大きくて、温かくて、なんでも抱きとめてくれるクマさん。子どもたちの帰りを見送ったあと、ロビーの日だまりのなか、ひとり物思いにふけているご様子。これから子どもたちはどんなふう成長していくのだろう…。クマさんも「育てること」のテーマに一役買っています。